

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～

朴 希沙 (Kisa Paku)

マイクロ・アグレッションという言葉を知ったことがあるでしょうか。微細な攻撃とも訳せるこの言葉は、旧来とは異なる新しい差別のあり方として、1970年代に米国で提唱されました。その歴史や内容の詳細はまた次号以降に譲るとして、今号では私がこの言葉にまつわる物語を連載させてもらうことになった経緯、そして副題の意味について書きたいと思います。

・自分と社会の接合点——ライフワーク

私は2015年度に立命館大学大学院の応用人間科学研究科を修了し、現在は臨床心理士として女性や子どもを対象とした心理臨床の仕事をしています。ところが、この仕事以外にも、読書会やバンド、翻訳会や姉の子どもたちのベビーシッター等様々な活動を一生懸命しているので、時々自分の

本業は一体なんだったか分からなくなる時すらあります。結構、多忙な毎日です。ただ、お金にはならなくても、自分の人生における仕事（ライフワーク）は何かと聞かれたら、それは結局「分断から動き出す交流」だと言えます。

大学院に入学した当時、私は在住地域で友人らと、在日コリアン（以下、在日）のための活動を行っていました。非常にひっそりと、しかし濃密な活動を行って、すでに数年がたっていました。会の名前は「それが一人のためだとしても（してもの会）」。

「それがたった一人のマイノリティのためだとしても」社会や自分自身が変化していくことを求めて始まった会でした。ところで、大学院に入学したばかりの私は、自分のやっている活動なんてめちゃくちゃ「しょぼい」ことだし、別に社会から認められるようなことはなんにもないだろうとたかをくくっていました。そもそも当時は、日

本社会に対する疑問や不信ばかりで、自分がどのように社会とかかわっていけるのかも見当が付きませんでした。

だから今自分がこうやって臨床心理士になったり、実際仕事をしたり、対人援助学マガジンに書きものをしたりしていることを考えると、不思議な気持ちになります。その契機になったのは、してもの会の活動を修士論文でまとめたことでした。これをきっかけに、私は自分がやっていることを社会の中に位置づけ始めます。また、在日や社会的マイノリティに対する心理社会的支援の必要性を言語化したり、研究したりすることの重要性を初めて認識しました。その言語化のひとつが、これから対人援助学マガジンに連載すること、というわけです。

・「カラカラなら泥水でもすする」

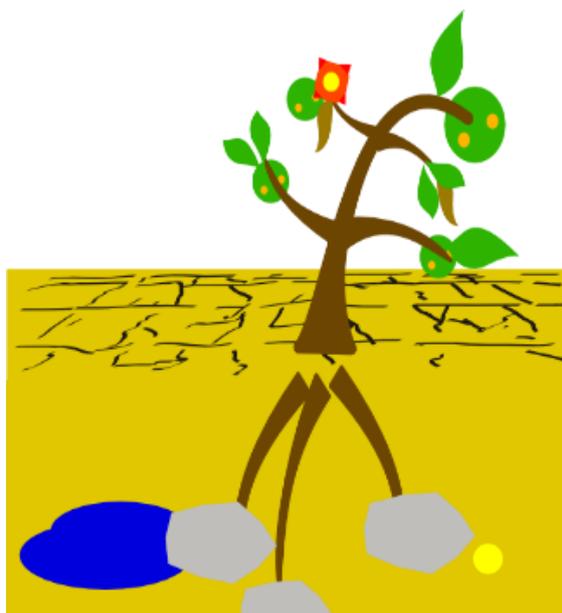
～1本の木の物語～

ここで少し、先から触れているしてもの会について紹介したいと思います。

この会では、べてるの家の「当事者研究」の手法を用いて、それぞれの悩みや困りごとについてシェアすることを中心に、勉強会や音楽活動等を行っていました。しかし最もよくやっていた活動といえば、とにかく話をすること、盛んに交流することでした(会の詳細については、『質的心理学研究』18号に『してもの会』における **Respectful Racial Dialogue** の実践」という論文を投稿しましたので、興味のある方はそちらも参照してもらえればと思います)。話の内容は、参加者の当事者研究や最近ハマっているこ

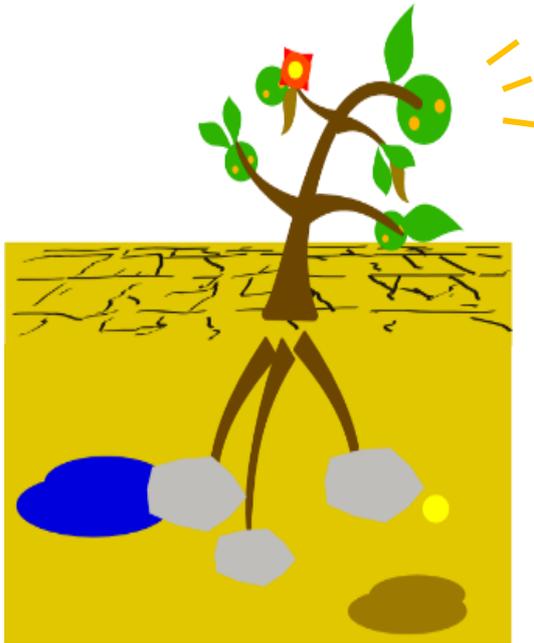
となど様々でしたが、最もホットなトピックは、まさに今、ここで私たちの間に生じている違いや分断、対立、そして共通の願いに関することでした。

そのしてもの会の当事者研究の過程で生まれたメタファーに、「泥水すする」木の物語があります。



この絵を見て、皆さんはどんなことを思われますか? 「なんだか曲がった木だなあ」とか、「花がついている」、「地面がカラカラだ!」といったことに気づかれるかもしれません。これは、してもの会の在日参加者たちの当事者研究から生まれた、自分たちを表現する木です。一見、「もっとまっすぐ立てよ」とか言われそうです。ところが根っこをみると、いくつもの岩が養分や水分を吸収することを阻んでいることが分かります。ここで、養分や水分は周りからの理解やサポートを、岩は辛い家庭環境や周りに理解してもらえない自らのルーツ等を表しています。

実際、水も養分も吸えなければ、この木



はまもなくカラカラにひからびて枯れてしまうでしょう。

しかし、木は自分の足元に、「泥水」を発見します。それは、きれいな水に比べれば汚くてドロドロしているものかもしれませんが、木にとっては「すすれる」「吸い上げられる」ものです。現実では、泥水とは例えば気まぐれに自分を認めてくれる人だったり、たくさんのお酒だったりするかもしれません。それは人それぞれでしょう。ただ、きれいな水のように栄養がなく、飲んだらおなかを壊したり、周りから汚いと思われるけれどもサポート資源ではあります。

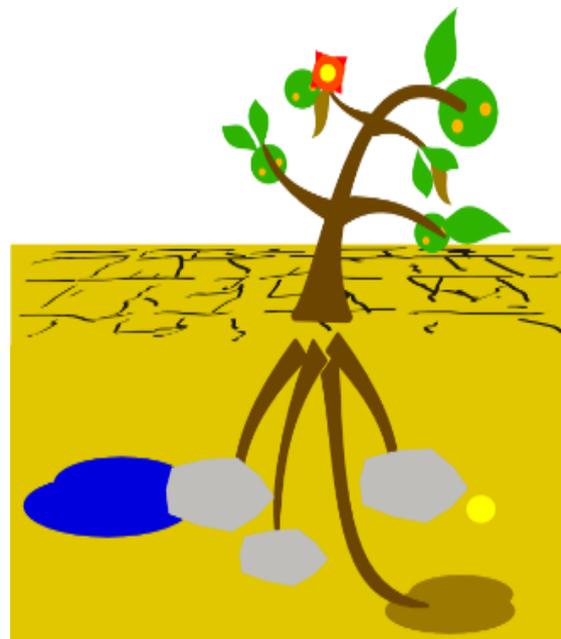
そんな泥水を「吸い上げる」時、一番葛藤するのは本人です。岩が見えない周りからは、「何やってるの」「あんな変なものを養分にしている！」と思われまます。泥水すするしかない自分のことを、みじめに感じる事だってあるでしょう。それでも、木は根を伸ばします。それは、自分が今の環境で少しでも養分を得るためです。

ちょっと抽象的な表現になってしまいましたが、してもの会の当事者研究では例えばこんな悩みが持ち込まれていました。それは自らの環境の中で、自分がいやでも切れない人間関係や依存の問題に苦しむ一人ひとりの姿でした。それは「泥水すすって」生きながら絶えず葛藤し、環境や自分自身とまさに「苦闘」している姿だったといえます。

・「自分も“岩”のひとつなのかもしれない」 ～言葉に出来ない圧をめぐって～

してもの会の参加者は、在日だけではありませんでした。そこには、在日と親しい関係にあって、もっとこれから関係をよくしていきたいと思っている日本人も参加していました。他にも、ただ当事者研究やしてもの会の集まりが面白そうで来ている人たちもいました。

先に、木の根を阻む「岩」のひとつとし



て、「周りに理解してもらえない自らのルーツ」について触れましたが、これは具体的には、在日が日本社会で日々直面している差別やあいまいな攻撃のことを指しています。これについても、また号を改めて詳しく書きたいと思いますが、在日の悩みについて扱っていくにつれて、その悩みには個人的なものだけでなく、日本社会や日本人との間に生じている葛藤が複雑に関係していることが分かってきたのです。

しかしそれは、非常に言葉にしづらいものでした。ネットで書かれているようなあからさまな攻撃を直接あびせられることは、ほとんどの人はありませんでした。むしろ日々の生活の中で、小さな埃のように降り積もって自らの中に固く染み付いている体験こそ、言葉にすることが難しく、また深刻なものだったのです。

そして、その小さな攻撃、些細な対立はもちろんしてもの会でも起こっていました。在日といい関係を結びたいと思っている日本人、その「自分も、在日にとっては“岩”のひとつになのかもしれない」。この認識をめぐって、してもの会では様々な対立・そして交流が展開されていきます。

このような過程の中で、私は次第に旧来のあからさまな差別とは異なる新しい形態の差別、「マイクロアグレッション」という概念に近づいていきました。そして、それを乗り越える実践として、「**Respectful Racial Dialogue**」を考えるようになるのです。

・・・続く